

Title	朱権の『瓊林雅韻』（下）
Author(s)	佐々木, 猛
Citation	大阪外国語大学論集. 7 p.37-p.68
Issue Date	1992-09-16
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79565
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

朱権の『瓊林雅韻』(下)

佐々木 猛

目次

1. はじめに
2. 朱権の生涯
3. 朱権の著述、『太和正韻譜』など
4. 『瓊林雅韻』について、著録
5. 『瓊林雅韻』の体例
6. 『瓊林雅韻』の音系
7. 十九韻各論、附音節表
8. おわりに
- 附注
- 文献表
- 略年表
- (上) 編、正誤表

7. 仁恩

○平声

韻目を表わす字の含まれる小韻が韻の冒頭に来る。「1 仁」は卓本においては〔陽〕の項、「24 民」「25 倫」の間にあり、「2 恩」は〔陰〕の項、「20 根」「21 欣」の間にあった。

卓本は「16 孫」「17 敦」の間に「尊樽」小韻があったが、朱本では「10 遵尊樽樽僊」の小韻に合併し、更に「樽僊」の二字を増補している。「尊樽」は中古音の一等韻の字、「遵」は三等韻の字で、卓本においては〔tsuən〕〔tsiuən〕の区別があったが、朱本ではともに〔tsuən〕となっている。『正韻』にも八真に「尊祖昆切……鶻……遵……僊……跽」とある。

「25 倫論綸綸綸綸」小韻に収められる字のうち「論」は卓本・周本では「綸」字とともに別の小韻を成す。そして中古音の一等韻字から成る「論綸」小韻と三等韻の字から成る「倫綸綸綸綸」小韻とが対立している。朱本では一見この区別がなくなっているようであるが、実は『正韻』の八真、「龍春切」小韻「倫論綸綸綸綸綸」からそのまま字を拾ったためにこのようになったので

韻 母 聲 調	7. 仁 恩 其一								其二							
	平・陰		平・陽		上		去		平・陰		平・陽		上		去	
冰 破 梅	奔 噴	18 52	盆 門	53 28	本	75	透 噴 悶	113 109 112	賓	5	貧 民	23 24	品 悶	81 65	鬚	89
風 無	分	45	墳 文	46 30	粉 勿	73 72	分 問	93 102								
東 天 暖 來											(紉) 澹	57 22			吝	88
早 從 雪									津 親 新	6 37 4	秦	38	(儘)	82	盡 信	92 86
枝 春 上 人	榛 姚	11 12					襯	95	真 贖 申	3 35 33	陳 神 仁	36 34 1	軫 晒 忍	59 60 61	震 ◎ 賢 刃	85 90 87
見 開 何 一	根 根 恩	20 54 2	痕	55	墾 狠	79 77	恨	115	巾 欣 因	8 21 31	勤 銀	27 32	緊 隱	62 64	近 疊 印	94 110 96

其三								其四							
平・陰		平・陽		上		去		平・陰		平・陽		上		去	
敦 吞	17 50	屯 圖	51 29	昏	80	頓 褪 嫩 論	107 118 116 103			倫	25				
遵 村 孫	10 48 16	存	49	(搏) 付 損	84 71 69	寸 遜	114 98	○ (逡) 詢	56 42	徇	41	笋	68	俊 峻	97 99
								諄 春	7 39	昏	40	准 蠡	66 70	[稭] 舜 閏	108 100 101
昆 坤 昏 溫	14 19 58 15	(魂)	47	袞 閏 穩	76 78 74	[棍] 困 混 (孚)	118 106 111 117	君 熏 盒	9 13 43	裙 雲	26 44	窘 允	63 67	郡 訓 蘊	105 104 91

ある。字の配列順序は朱本も全く同じである。この小韻の「論」字について『正韻』は「礼記、凡制五刑、必即天論、注言理也」といい、「盧昆切」の小韻に収める「論」字については「説也、議也、思也、細繹討論也、又決罪曰論」という。一方、朱本の「25倫」小韻の「論」は「言理」という注解が附せられているので『正韻』の「龍春切」の方の「論」[liuən]と同じ語であることが分る。

〔陰陽〕の項の「41詢」「42詢」二小韻は陰陽の順が逆になっている。卓本にあるように「41詢」「42詢」の順に配列するべきである。

卓本は「47魂」の位置に〔陰〕の小韻「昏婚葦」があり、対応する〔陽〕の小韻を欠いている。朱本は卓本に欠けていた〔魂〕小韻をここにおき、この位置にあった〔昏〕小韻を韻末においている。その理由はよく分らない。

韻末に他にも二つの増加小韻「56遯」「57紉」がある。いずれも周本〔陽〕の小韻である。

○ 上声

韻末に三つの増加小韻がある。そのうち「82儘」「84樽」は周本に存在していたが、「83𪔐_{純目}」は卓本・周本いずれにも見えない。この字は『広韻』の去声二十二稊「之閏切」に「𪔐_{純目}」とあり、『集韻』には更に平声の十八諄「朱倫切」に「𪔐_{純目也}」とあるが、本韻の上声においてどの位置を占めるのか分らない。

○ 去声

「102問」以下の小韻の順序は卓本と些か出入りがある。その一一について述べるのは煩雑であるので対照表を掲げることにする。

卓 本		朱 本
97 問		102 問
	↗	103 論
98 訓	↘	104 訓
99 郡		105 郡
100 困		106 困
101 頓		107 頓
	↗	107A 遁
	↘	[108 稊]
102 悶	↘ 朱本 112	
103 噴		109 噴
104 褪	↗ 朱本 118	
101A 遁	↘ 朱本 107A 遁	
105 𪔐		110 𪔐
106 論	↗ 朱本 103	

107 混	└─ 111 混
	└─ 112 悶
108 迹	113 迹
109 寸	114 寸
110 恨	115 恨
111 嫩	116 嫩
	(117 搢)
	(117A 譚)
	└─ [118 棍]
	└─ 119 褪

卓本の「101A遁」は朱本では「107A遁」の位置に移されているが、その「107頓圀鈍」「107A遁」の間の〔○〕印は誤りであると考えて両小韻を合併する。周本も「屯圀鈍遁盾沌」の一小韻である。

「108稊東釋也」は卓本・周本いずれにもない小韻である。『正韻』去声・八震に「稊朱闕切東釋」とあるのによって増補したのであろう。

「117搢相貼兒」「117A譚戲言也巧言也」は韻末の増加小韻である。周本には「搢譚」の小韻があり、「117」「117A」の間の〔○〕印を誤りであると考え、この二小韻を合併する。

「118棍」小韻は卓本・周本いずれにもないが、『正韻』上声八軫に「混湖本切棍譚輝輝韻」とある。現代北京音は〔kuən〕の去声である。

周本にある「趁疚」小韻を朱本は収めない。

8. 安閑

○ 平声

卓本では「3丹」「4山」の間に「安鞍」小韻があるが、朱本は韻目を構成する字のある小韻であるためにこれを韻の冒頭におく。同じく「2閑」小韻も卓本においては「19顔」「20潺」の間にあった。

〔陰〕の項の最後の小韻「13慳」と〔陽〕の項の最初の小韻「14寒」の間に卓本では〔陰〕の小韻「𪛗」があるが、朱本はこれを韻末においている。

○ 上声

冒頭の二小韻の順序が卓本とは逆になっている。

「30坦袒」(・印の字は卓本にはない)

「31反返坂」

このあたりもこの例以外はすべて卓本の小韻の配列順序そのままである。思うに「反」字を冒頭におくのを避けたのであろうか。

韻母 聲母	8. 安 閑 其一				其二			
	平 · 陰	平 · 陽	上	去	平 · 陰	平 · 陽	上	去
冰 破 梅	班 11 攀 12	蠻 18	飯 39	辦 66 (盼) 72 慢 67				
風 無	番 27	煩 28	反 31 晚 37	飯 53 萬 47				
東 天 暖 來	丹 3 灘 23	壇 24 難 15 蘭 16	(亶) 46 坦 30 赧 40 懶 35	旦 52 嘆 54 (難) 70 爛 59				
早 從 雪	餐 21 珊 5	殘 22	趲 36 撒 34	贅 60 祭 58 散 69				
枝 春 上 人	趲 29 山 4	潺 20	盞 41 產 43	棧 49 訕 65				
見 開 何 一	干 6 刊 8 安 1	寒 14	(趕) 45 侃 33 罕 32	幹 56 看 57 旱 51 案 55	姦 7 慳 13 ◎	閑 2 顏 19	簡 42 眼 44	間 63 限 48 鴈 64

其三			
平 · 陰	平 · 陽	上	去
◎ 拴 10			撰 50 纂 68 (涮) 74
閑 9			慣 61
彎 25	還 17 頑 26	綰 38	患 62 (腕) 73

韻末に増加小韻「45趕稗簪」「46瘡瘡」がある。いずれも周本に「趕稗簪」「瘡瘡」とあるが、『正韻』上声十産の「瘡多簡切」小韻に「瘡病也……亦作瘡」とあり、「瘡」は「瘡」の異字体であることが分る。

○ 去声

韻末に五つの増加小韻「70難」「71渲」「72盼」「73腕」「74淵」がある。そのうち「淵洗也」は周本にもない小韻である。『正韻』にもない。『広韻』去声三十諫「生患切」の小韻に「淵洗也」とある。

周本においてこの「淵」小韻の位置を占めるとされる「71渲小水也」は『正韻』に見えない。『広韻』去声三十三線「息絹切」の小韻に「渲小水」とあるが、周本のこの韻の字は『広韻』山産欄・刪消諫の各韻に由来するものである。この字は例外的であり、本韻において占めるべき位置は分らない。

9. 端 鸞

○ 平声

卓本の第一小韻は「端」であったので朱本はこれに「端」字などを増補するだけで韻目を表わす字を冒頭におくことができた。一方「2鸞」は卓本では〔陽〕の項の最初の小韻であったのを朱本はこれを韻の冒頭に提前しなければならなかった。

○ 上声

「20管館脛脛瘡」「20A盥館」の間の〔○〕印は誤りであると考える。『正韻』上声九早に「管古緩切筭脛脛館館盥瘡幹館」とあり、「脛」字も『広韻』では「管」と同音であった。

「22澣浣暖」「22A脛莞」の間の〔○〕印も誤りであると考える。『正韻』上声九早に「緩胡管切、澣、浣、脛、暖、澣、脛、莞、脛、脛」とあり、両小韻の同音であることが分かる。

○ 去声

「39半泚伴」「39A絆拌叛畔」の間の〔○〕印は誤りであると考えられる。卓本は「半伴泚畔絆」の一小韻にまとめている。

韻末に二つの増加小韻「40彖」「41喚」がある。いずれも周本の韻末の一字のみから成る小韻である。

韻 母 声 母	9. 端 鸞				
	平・陰		平・陽		去
冰 破 梅	撥 潘	7 17	盤 瞞	18 8	半 判 羹 39 37 32
風 無					
東 天 暖 来	端 湍	1 13	団 鸞	14 2	短 瞳 暖 卵 23 25 19 26 鍍 (彖) (喚) 亂 34 40 41 35
早 從 雪	鑽 擻 酸	6 15 3	擻	16	纂 27 鑽 擻 筭 30 33 36
枝 春 上 人					
見 開 何 一	官 寬 歡 剗	4 5 9 11	恒 丸	10 12	管 欸 澣 腕 20 21 22 24 貫 喚 翫 38 29 31

10. 乾元

○ 平声

〔陰陽〕の項にある「26賢」「26A玄」の間の〔○〕印は誤りであると考える。そうして始めて「25軒」「26賢」の二小韻が陰陽の対を成すことができる。卓本も〔陰陽〕の項にあって「軒掀」「賢弦絃懸玄」が陰陽の対を成している。また、「玄」と対になるべき陰の小韻「8喧」も〔陰陽〕の項ではなく〔陰〕の項に位置している。

「29牽」の対応〔陽〕小韻「乾」は韻目を構成する字であるとして、韻の冒頭に移動してある。

「32淵」の対応〔陽〕小韻「元」も韻目を構成する字であるとして、冒頭に移動している。

卓本では「50犬」「51展」の間に「淺」小韻があったが、朱本はこれを「58淺」の位置にさげている。

韻 母 声調 声母	10. 乾 元 其一								其二							
	平・陰		平・陽		上		去		平・陰		平・陽		上		去	
冰 破 梅	邊 篇	7 30	胼 眠	31 15	匾 (諷) 免	64 65 62	辯 片 面	77 76 75								
風 無																
東 天 暖 来	顛 天	5 23	田 年 連	24 14 13	典 腆 撚 輦	46 45 48 54	電 練	71 73			縑	18	嚮	56	戀	82
早 從 雪	錢 千 先	3 21 19	前 涎	22 20	剪 淺 鮮	53 58 44	箭 霰	81 78	錦 痊 宣	11 33 35	全 旋	34 36	(吮) 選	55 61		鏃 83
枝 春 上 人	璉 羶	9 10	塵 然	17 16	展 闡	51 63	戰 扇	85 80	專 穿	12 37	缸	38	轉 喘 軟	57 60 59	傳 釧	84 79
見 開 何 一	堅 牽 軒 煙	4 29 25 27	乾 賢 筵	1 26 28	蹇 遣 顯 究	47 52 49 42	見 (譴) 猷 硯	68 86 69 72	鵲 圈 喧 淵	6 39 8 32	權	40	捲 犬 苑	43 50 41	眷 勸 輶 院	74 67 70 66

韻末に増加小韻「65諱」がある。周本も一字のみから成るこの小韻を韻末においている。『正韻』は上声十一銑の「扁補典切」小韻にこの字を収めるが、この反切に従えば幫母に属することになる。今は周本における位置や現代普通話の音に従って〔p'ien〕上声としておく。

韻末に増補字「65A掬斯也与剪字同」がある。この字は注記によって「53剪翦翦讞」小韻に加えるべきである。『正韻』上声十一銑にも「翦子錢切剪……掬……翦讞……」の同一小韻に収めている。

○ 去声

「69猷現憲縣絃銜玆」の末尾の三字は卓本・周本いずれにも収められない。恐らく朱本におけ

る増補字であるが⁽³²⁾、すべて合口の字であり、これに合口の小韻「70韞眩絢」が続く。「縣」字も本来合口字であるから、「憲」字と「縣」字の間で小韻を分けるべきであろうか。或いは「縣」字は現代北京音[xiɛn] 去声も合口音ではないことから

「69獻現憲縣」

「70炫銜珣韞眩絢」

のように小韻を分けることもできよう。

韻末に増加小韻「86遣牽樺」がある。この小韻は周本にすでにある。

11. 簫韶

○ 平声

韻の冒頭に二つの陽の増加小韻がある。いずれも対応する陰の小韻をもつので本来は〔陰陽〕の項に収めるべきである。そのうち「2韶」は韻目を構成する字であるためにこの位置はおかれたのであろうかが、「1堯」がなぜここにあるのかはよく分からない。注解の「至高兕」と何か関係があるのであろうか。

「12包」「13褒」の二小韻は卓本にある通りに配列されている。周本もこの二小韻を区別しており、一般的には前者が中古音二等韻、後者が一等韻の字であることから、これらの韻母の差異をそれぞれau、auと考えている。本韻におけるこのような唇音の対立は他にも上声、去声に見られるが、いずれの場合も二小韻は隣接して出現するのである。この間の〔○〕印、或いは卓本においては〔空〕を伝写の誤りであると考え、この二小韻を一つに合併することも可能であろう。

「32超招韶韶」は韻末にあらざる増加小韻である。周本においては「超」字のみからなる小韻として韻末にあった。それがなぜ朱本においてはこの位置にあるのかよく分からない。〔陰陽〕の項に増補されながら対応する陽小韻「2韶」は前述の如く韻の冒頭に出されている。

以下、小韻の順序の卓本と合わない箇所が続出する。このあたりは朱本の編纂に混乱が見られるようである。たとえば、卓本では「32趨」「33喬橋」の陰陽の対であったものが、朱本では「35翹趨④鑿僑」「35A眊」「36喬喬橋」のようになっている。陽の小韻にあるべき、「翹僑」の二字を陰の小韻である「35趨」に増補し、更に「眊_{摩也}」の字を加えているのである。いま対応する陰の小韻の代表字を仮に「35趨」としておく。⁽³⁴⁾

卓本の〔陰陽〕の項の後半は次のようになっており、対応する小韻を欠くものがある。

「38拋」―「 」

「 」―「39豪」

「40條」―「41桃」

「42操」―「42曹」

朱本はまず「拋」に対応する陽の小韻「袍」を増補し、それに続く小韻を以下のように配列した

韻 母 聲 調	11. 簫 韶 其一			
	平・陰	平・陽	上	去
冰 破 梅	褒 13 拋 41	(袍) 42 毛 26	宝 78 (剖) 99 卯 79	抱 142 砲 146 貌 145
風 無			缶 95	
東 天 暖 來	刀 18 條 50	桃 51 饒 27 牢 28	倒 89 討 84 腦 85 老 83	道 132 〔套〕 157 鬧 147 滂 150
早 從 雪	遭 20 操 44 騷 19	曹 45	早 88 草 87 嫂 86	竈 143 造 151 掃 153
枝 春 上 人				
見 開 何 一	高 17 (尻) 14A (蒿) 48 塵 21	豪 49 (鼈) 47	皋 90 考 93 好 91 襖 92	告 148 浩 131 傲 149

其二			
平・陰	平・陽	上	去
包 12		飽 77	豹 141
		撓 94	
嘲 15 (抄) 43 鞫 6	(巢) 46	爪 81 炒 82 (稍) 100	罩 140 鈔 154 (哨) 156
交 11 敲 14 哮 39 凹 16	爻 40	狡 80 巧 76 (敵) 98	教 139 (孝) 138 拗 144

(注33)

奧 152

其三			
平・陰	平・陽	上	去
標 10 飄 37	瓢 38 苗 25	表 74 (殍) 96 眇 73	(俵) 137 (妙) 158
刁 4 挑 29	迢 30 寮 23	挑 69 鳥 65 了 66	釣 127 耀 126 (擲) 155 (料) 159
椒 8 鋏 33 簫 3	樵 34	〔勦〕 97 悄 75 小 63	(醺) 136 (俏) 135 笑 125
昭 22 (超) 32 燒 9	(韶) 2 饒 24	沼 71 少 70 擾 72	趙 129 少 130
嬌 7 趙 35 臬 5 邀 31	喬 36 (堯) 1	皎 64 曉 67 杳 68	(叫) 134 窳 128 耀 133

韻母 聲母	11. 簫 韶 (入) 其一		
	平	上	去
冰 破 梅	薄 55	剝 104	幕 165
風 無	縛 62		
東 天 暖 來	鐸 53	託 110	搭 絡 161 166
早 從 雪	昨 57	作 111 錯 112 練 115	
枝 春 上 人	濯 52	捉 102 (擲) 121 朔 103	
見 開 何 一	鶴 56	各 113 壑 114 〔惡〕 124	萼 167

(入) 其二		
平	上	去
		虛 164 略 162
〔噲〕 61	爵 107 鵲 108 削 109	
着 58 杓 60	繳 105 綽 119 爍 106	弱 163
學 54	覺 101 〔殼〕 122 謔 120	嶽 160

鏹 118

(入) 其三		
平	上	去
		〔捋〕 169
鏹 59	郭 117 廓 116 〔握〕 123	〔握〕 168

おしている。（○印をつけた小韻は朱本における増加小韻である。）

「41抛」—「㉔袍」

「㉔抄」—「 」

「44操」—「45曹」

「 」—「㉔46巢」

「 」—「㉔47鼈」

「㉔蒿」—「49豪」

「50條」—「51桃」

このうち「43抄」は「46巢」と陰陽の対を成し、「47鼈」は〔陰〕の項にある「21鑿」と陰陽の対を成す。

○ 入声作平声

卓本では「55薄」「56鶴」の間に「62縛」小韻をおく。また「59鑊」「60杓」の間に「58着」をおく。

「61嚼齧也」は卓本・周本いずれにもない小韻である。ちなみに「齧也」という注解は『集韻』に見える『説文』の系統のもので、『広韻』『玉篇』の「咀嚼」というのとは異なる。⁽³⁵⁾

○ 上声

上声の後半部分から入声作上声、去声、入声作去声の途中まで、三葉にわたって一葉ごとの順序に出入がある。装訂の際のとし誤りであると考えられる。

「70少」「71沼」の二小韻は卓本では順序が逆である。

「77飽」「78宝」二小韻の間に〔○〕印は附されていないが、卓本では該当小間の間に〔空〕があり、周本は一字のみから成る「飽」小韻を韻末に移している。「飽」字は中古音二等韻、「宝堡葆葆襦」はすべて一等韻の字であることから、周本においては平声の場合と同じく両者に韻母の違いを想定する。今は朱本がここに〔○〕印を附し忘れたと考え、この二小韻を区別しておく。

韻末に五つの増加小韻がある。そのうち「96殍漂漂剽剽」「98敵」「99剖」「100稍」は周本に存在する小韻でそれぞれに収める字数はすべて同じである。「97勦絶也」の小韻は周本にも見えない。『正韻』上声十二篠の「子了切」の小韻に「剿絶也……亦作勦」とある。

○ 入声作上声

「雀」字は卓本では「107爵」小韻に収めるが、朱本はこれを「108鵲」小韻に収めている。中古音は精母の字であるが、現代北京音などは、いわば清母に読んでいる。

「廓開也虚也郭城郭也櫛櫛櫛也郭皮去毛也曠耳曠也曠張大也」

がある。卓本の「廓郭」にあとの四字を増補したのであろうが、見母溪母の字が混合して並んでいる。卓本の二字の間に〔空〕を認めて「廓」「郭」の二小韻に分け、それぞれに字を増補するべきではなかったか。『正韻』入声六葉に次のようにある。

「廓苦郭切開也虛也……鞞説文去毛皮也……擴張大也……漚水名在魯」「郭古博切城郭……榔外格俗作榔……樽……」

また『広韻』入声十九鐸の「郭古博切」小韻に「曠耳曠」とある。

「118鑊大鑊也」は韻中の増加小韻である。周本にも存在しない。『正韻』入声六藥の「鑊既鑊切」小韻に「鑊大鑊」とあるが、朱本においてどのような位置を占めるのかよく分らない。

韻末に五つの増加小韻が並ぶ。「121擲擲」小韻は周本にあるが、「122穀」「123握」「124惡」はいずれも周本にも見えない小韻である。末尾の「124A 齷齷齪与數字同」は附注によって「121擲擲」小韻に併せるべきである。

○ 去声

「134呌」「135俏」「136熊」「137倭」「138孝」は韻の途中にある増加小韻である。この去声の項、卓本は周本に比して10小韻を欠き、25小韻を有するのみである。卓本はこのあたりに欠落があり、朱本のこの韻中の増補小韻がそれに相当すると考えることもできようか。

「141豹爆瀑曝暴曝曝曝飽飽試飽」

「142抱報抱」

は卓本の「117豹爆瀑」「118抱報」の二小韻にそれぞれ増補字を加えたものであろう。しかし平声・上声の場合とは異なり、中古音一等韻の字、二等韻の字がそれだけで一小韻を構成することではなく、「141豹」小韻には一等韻、二等韻の字が混合して収められている。ちなみに周本は「121豹爆瀑」「122抱報暴飽飽飽」のように増補し、やはり一等韻、二等韻の字を混合している。

韻末に六つの増加小韻がある。そのうち「154A 竅孔竅也」は「128竅穴也空也」と同じ字の重出である。『正韻』去声十二嘯に「竅苦弔切穴也空也」とあるので、「154A 竅孔竅也」の方は別の資料によって増補したのであろう。「157套縛也」は周本にも見えない小韻である。『正韻』にもない。

○ 入声作去声

韻末の二小韻「168握持也握維握也」「169捋取物也」は周本にも見えない増加小韻である。『正韻』入声六藥の「乙角切」小韻に「握持也握小爾雅覆張謂之握」とある。また三曷に「捋盧活切撻取也繫也本作孚」とあるが、これは旧-t入声の字である。「165慕」小韻にも周本と同じく-t入声の字「末沫」があるが、これらの字が周本においてauの音をもつのは例外的な現象である。

12. 珂和

○ 平声

冒頭の韻の配列順序は「1多」「2和」「3歌」「4科」となり、卓本と異なっている。卓本の〔平声〕〔陰〕は「1歌」「2多」「3科」の順に並び、「10禾和」は〔陽〕の項にある。「和」字は韻目を構成するので、これを小韻代表字とし、「2和禾盍」小韻を前に出したのであろうが、「1多」小韻がなぜ韻の冒頭にあるのか分らない。或いはもとは「十二多和」という韻目を考えていたのであろうか。「珂和」の韻目を構成するもう一方の「珂」字を収めた小韻は卓本のもとの位置にある。

〔陰陽〕の項の陰陽の対を成す小韻の順序がずれている。

「19窩」—「21訛」

「20坡」——「22婆」

卓本もこの通りに並んでいる。

韻末に増加小韻「**23摩**摩摩又滅也**磨**磨禍也**魔**鬼魔**摩**削也**廬**杯也**麼**小也又助語」がある。周本は平声〔陽〕に「**摩磨魔磨廬**」小韻が、〔陰〕に「**麼**」小韻がある。朱本は恐らくこれをまとめて韻末に置いたのであろう。

○ 入声作平声

十二小韻中卓本に存在していたのはわずかに四小韻のみである。朱本における増加小韻は八小韻にのぼるが、これらはすべて周本に見えるものである。

「29薄」「29A勃」の間の〔○〕印は誤りであると考える。「29薄」小韻は『広韻』入声十九鐸韻に由来する字、「29A勃」小韻は十一没韻に由来する字を、それぞれ収めるが、周本においては同音となっている。

韻 聲 調		12. 珂 和 其一					
		平 · 陰	平 · 陽	上	去		
冰 破 梅							
風 無							
東 天 暖 來							
早 從 雪							
枝 春 上 人							
見 開 何 一	歌 珂 阿 阿	3 5 11 17	何 哦 12 18	珂 可 荷 (珂)	36 39 47 53	箇 嗑 賀 餓	69 86 70 71

其二							
平 · 陰		平 · 陽		上		去	
波 坡	8 20	婆 (摩)	22 23	跛 (頗) 麼	45 52 50	簸 破 麼	80 82 81
多 他	1 15	駝 那 羅	16 10 9	朶 妥 娜 裸	43 44 49 42	舵 唾 糯 邏	73 79 85 84
磋 莎	13 7	挫	14	左 (挫) 鎖	40 51 37	佐 銓 些	72 76 74
才 科 窩	6 4 19	和 訛	2 20	果 顯 火 我	41 48 46 38	過 課 禍 臥	75 77 78 83

○ 上声

韻末に三つの増加小韻「51脞」「52頰𪛗」「53𪛗」があるが、いずれもそのまま周本に見える。

○ 入声作上声

韻の途中に増補した小韻が多く、しかもいずれもが周本にも見えない増加小韻である。

韻母 声母	12. 珂 和 (入) 其一		
	平	上	去
冰 破 梅	跋 27	撥 55 潑 64 抹 65	幕 88
風 無			
東 天 暖 来	(鐸) 30	〔怛〕 62	捋 89
早 從 雪			
枝 春 上 人			
見 開 何 一	合 26	葛 54 癘 59 〔喝〕 67 〔遏〕 58	萼 95

(入) 其二		
平	上	去
		虐 93 略 91
(着) 34 (杓) 35		弱 92
(學) 32		嶽 87

(入) 其三		
平	上	去
(薄) 29		
(縛) 28		
奪 25	掇 68 託 63	諾 90 落 94
(鑿) 33	撮 66	
(濁) 31		
活 24	聒 57 濶 60 〔豁〕 61 〔幹〕 56	

まず「56幹運也転也」があるが、『正韻』入声三曷に「幹烏活切、転也旋也運也」とある。次に「58遏止也」がある。『正韻』入声三曷に「遏阿葛切、絶也止也」とあるが「淹」字は収めない。『集韻』入声二十七合「遏合切」の小韻に「淹滅火也」とある。

卓本では「46闊」「47撮」「48掇」「49脱」の順に小韻が並んでいるが、朱本では「60闊」「61豁」「62怛」「63託」となる。卓本の「47撮」「48掇」二韻は韻末に移り、かわりに周本にも存在しない増加小韻「61豁」「62怛」が韻の途中であるこの箇所に増補されている。そのうち「61豁豁達 藿菜石 藿吐病 藿裂也 霍姓也」に収められる各字は、『正韻』入声三曷に「豁呼括切……豁達」とあり、六葉に「霍忽郭切山名國名又姓……藿大豆葉又香草……藿吐病」とある。また『広韻』入声十九鐸の「霍虛郭切」小韻に「藿裂也」とある。「62怛惜也」は『正韻』入声四轄「当拔切」の小韻に「怛驚也懼也」とあり、『集韻』入声十二曷に「怛当割切説文惜也」とある。朱本の注解「惜也」はこの「懼也」を写し誤ったものであろう。

韻末近くに増加小韻「67喝叱也叫也」がある。これは周本にも見えないが、『正韻』入声三曷に「喝許葛切訶也」とある。

○ 入声作去声

「89捋取物也」は韻の途中にありながら周本にも見えない増加小韻である。『正韻』入声三曷に「捋盧活切掇取也摩也」とある。

13. 嘉華

○ 平声

「1嘉」小韻は卓本・周本においても韻の冒頭にあったが、いずれも第一字は「家」字であった。朱本は韻目を表わすために「嘉」字を小韻代表字としている。

陰陽の対となっている「2華」「3花」の二小韻は卓本では〔陰陽〕の項の最初に「花」「12華」の順に並べられていた。朱本では韻目を表わすために陰陽の順を逆転して韻の冒頭に提前している。

「15霞」小韻は〔陰陽〕の項にありながら対応する陰小韻を欠けている。卓本も同じ。韻末の増加小韻「21鰕魚属」がこれに相当するのであろう。『正韻』平声十五麻「虚加切」の小韻に「21鰕魚属」とある。

韻末の増加小韻には他に「20瓜蔓生茹也」「22他誰也亦作佗」がある。そのうち「22他」は周本にも見えない小韻であるが、韓孝彦らの『五音類聚四声篇』卷十五に「他吐何切誰也本亦作佗字」とある。また『正韻』平声十五麻に「瓜古華切蔓生茹也」とある。

○ 入声作去声

韻末近くに増加小韻「28拔提也引也」がある。周本には存在していた小韻で、『正韻』入声三曷「蒲檢切」小韻に「拔回也抽也攪也」とある。

韻母 声母	13. 嘉 華 其一			
	平・陰	平・陽	上	去
冰 破 梅	巴 6 葩 16	琶 17 麻 10	把 34 馬 30	罷 64 怕 62 罵 55
風 無				
東 天 暖 來	〔他〕 22	拏 11	打 39	大 65 (那) 69
早 從 雪		咱 12		
枝 春 上 人	查 8 叉 18 沙 5	茶 19	鮓 37 吒 38 洒 33	詐 59 詫 58 (厓) 68
見 開 何 一				

其二			
平・陰	平・陽	上	去
嘉 1		竿 32	鴛 56
〔鰕〕 21 鴉 13	霞 15 牙 14	雅 31	下 60 亜 57

其三			
平・陰	平・陽	上	去
抓 9	耍 40		
(瓜) 20 誇 5 花 3 蛙 4	華 2	寡 35 瓦 36	卦 66 跨 63 化 61 凹 67

韻 母 聲 母	14. 碑 琊 其一				其二			
	平 · 陰	平 · 陽	上	去	平 · 陰	平 · 陽	上	去
冰 破 梅								
風 無								
東 天 暖 來	爹 4 些 10	斜 11						
早 從 雪	嗟 5		姐 31 且 29 寫 27	借 55 起 56 謝 52				
枝 春 上 人	遮 2 碑 1 奢 8	蛇 9	者 26 扯 32 捨 28 惹 30	柘 54 詹 57 舍 51				
見 開 何 一	[也] 13	[伽] 12 琊 3	野 25	夜 53	靴 6	癢 7		

韻 母 聲 母	14. 碑 琊 (入) 其一		
	平	上	去
冰 破 梅	別 20	鼈 43 警 47	減 59
風 無			
東 天 暖 來	疊 17 捏 58 俠 19	鉄 41	烈 61
早 從 雪	截 21	節 37 切 34 屑 33	
枝 春 上 人	舌 18	哲 48 轍 45 設 49	熱 62
見 開 何 一	傑 16 協 15	結 35 怯 36 血 38	拽 60

(入) 其二		
平	上	去
		劣 64
絶 24 𦵏 23	雪 42	
	拙 45 啜 50 説 44	藝 63
薊 22	玦 40 闕 39	月 64

○ 上声作平声

「13也語辭」「14者助語」の二小韻がある。この項は卓本にはなく、朱本の創設になるものであろう。『韻学集成』巻九遮韻、上声の「者」小韻に「中原雅韻作平声用、案諸篇韻無平声、皆作上声用」とあり、上声「野」小韻「也」字の条に「中原雅韻作平声」とあるが、邵榮芬はこれは『中原雅韻』が朱本を襲っているのであるという。また『太和正韻譜』が双調「離亭宴帶歇指煞」の実例として馬致遠の散套を示す中に「囑咐你箇頑童記者」とあり、命令を表わす語氣助詞の「者」に対して「作平声」という注を附している。

○ 入声作平声

韻の後半部分の小韻の配列順序は卓本と異なっている。

卓 本	朱 本
「16絶」	「19俵」
「17別」	「20別」
「18截」	「21截」
「19掇」	「22鐮」
「20鐮」	「23掇」
「21俵」	「24絶」

そして「19俵俵兒又小也」の小韻は周本では〔平声・陽〕の項に収められ、陸志韋・寥珣英の「中州楽府音韻類編校勘記」はそれに従うべきであるという。

○ 入声作上声

韻末に増補字「50A燿火迫也与歌字同」があるが、注記により「38血」小韻に合併するべきである。

○ 入声作去声

「63葵」小韻は卓本においては「64月」「65劣」小韻の間に配される。

韻末の増補小韻「65A懷懷懷也撼撼断也与撼字同」は注記に従って「59減」小韻に合併するべきである。⁽³⁶⁾

15. 清寧

○ 平声

韻末を表わす小韻を冒頭に出すことはしていない。

「1庚」「2京」の間に〔○〕印を加えて二小韻に分ける。卓本は二等韻の字から成る部分と三等韻四等韻の字から成る部分に分け、その間に〔空〕を置いている。朱本はこのそれぞれの部分に増補字を加えているようである。それ故「1庚」は二等字韻の字のみを収め、「2京」は三等韻四等韻の字を収めている。⁽³⁷⁾

韻母 聲母	15. 清 寧 其一				其二			
	平 · 陰	平 · 陽	上	去	平 · 陰	平 · 陽	上	去
冰 破 梅	(崩) 44 (烹) 43	(鵬) 45 (盲) 48	◎	(迸) 92 (孟) 93	冰 7 平盟 12 13	(乘) 68 娉 80 茗 56	病聘 73 命 80 72	
風 無								
東 天 暖 來	登 9 藤能楞 19 18 16	等 65 冷 57	鄧 74		丁 5 汀 35	亭寧靈 36 15 14	鼎艇領 63 64 59	定聽倭令 87 86 82 79
早 從 雪	憎 11 僧 10	層 17	贈 84		(精) 52 青 31 星 37	情錫 32 38	井請青 61 62 55	淨(倩) 81 性 88 78
枝 春 上 人	箏鑑生 4 20 3	橙 50	警 67	諍(撐) 75 96	征稱聲 6 25 33	澄繩(仍) 26 34 51	整逞 66 58	正稱聖 76 85 77
見 開 何 一	庚 1 享 21 ◎	莖 22		(亘) 95	京輕馨英 2 27 29 23	擎行盈 28 30 24	景 53 ◎影 54	敬慶杏映 69 71 83 70

〔迎〕 91

其三				其四			
平・陰	平・陽	上	去	平・陰	平・陽	上	去
(觥) 40 (轟) 39 (泓) 41	(橫) 49	◎	(橫) 94	肩 7 (兄) 42	(瓊) 46 (榮) 47 ◎	◎ 頃 ◎	(洵) 90 (詠) 89

〔陰陽〕の項の冒頭にある「20鑑」の対応陽小韻は増加小韻に囲まれて韻末にある(「49橙」)。韻末の増加小韻のうち「39轟」から「44崩」までは〔陰〕の小韻、「45鵬」から「51仍」までは〔陽〕の小韻が並び、末尾に〔陰〕の小韻「52精」が置かれている。そしてこれらの増加小韻はすべて周本に存在していたものである。

〔陰〕「39轟」「40觥」「41泓」「42兄」「43烹」「44崩」

〔陽〕「45鵬」「46瓊」「47熒」「48盲」「49横」「50橙」「51仍」

〔陰〕「52精」

このうち「47熒光也明也」「榮貴也顯也」「營營惑」の三字は周本においては「45熒營」「49榮」の二小韻に分けられ、その中古音がそれぞれ匣母、喻三母であることから、前者は[xiuəŋ] 平声陽、後者は[φiuəŋ] 平声陽であると推定されている。ところが「營」字にはもう一つの音、喻四母があるので、朱本はこちらの方を採用していると考えれば、この箇所を「熒」「榮營」のように二分することも可能である。一方、『正韻』平声十八庚に「榮于平切華也茂也……熒屋下燈燭光一日熒」とあり、「榮」「熒」二字を同音としているので、これによって「熒榮營」を一つの小韻としておくことも可能である。今これに従う。

○ 上声

韻末に増加小韻「68秉餅炳稟屏」がある。周本に存在していた小韻であるが、「稟」字は収めない。この字は『広韻』上声四十七寢に収められ、『正韻』上声八軫に収められるが、現代北京音では「秉」「餅」字などと同音となっている。

○ 去声

韻末に十一の増加小韻が並ぶ。

「88倩」「89詠」「90迥」「91迎」「92迸」「93孟」

「94横」「95亘」「96撑」「97餅」「98營」

このうち「91迎親迎也」「97餅酒器也」「98營甚酒也」は周本にも見えない小韻である。「91迎」は『正韻』去声十八敬に「迎魚慶切親迎也」とあるが、対応する平声十八庚において「迎迸也迓也」字は「凝魚慶切」小韻ではなく「盈餘經切」小韻に収められている。朱本においては「70映」小韻に合併するべきであろう。

「98營」は『正韻』去声十八敬に「詠爲命切……營甚酒」とあるように、朱本においても「89詠」小韻に合併するべきであろう。

一方、「97餅」は『正韻』平声十八庚に「平清明切……餅汲水器」、『広韻』平声十五青に「瓶汲水器……薄明切、餅上同」とあり、いずれも平声の字であることを示す。朱本がなぜこの項に収めるのか分らない。本韻平声「11平」小韻には「瓶汲水器」とある。

韻母 声調	16. 周 流 其一				其二			
	平・陰	平・陽	上	去	平・陰	平・陽	上	去
冰 破 梅		哀 17 〔謀〕 35	剖 48	茂 79	彪 8	牟 15		謬 84
風 無			(否) 54					
東 天 暖 来	尙 11 偷 29	頭 30 樓 16	斗 47 塙 51	豆 78 透 81 釋 79 陋 85	〔丟〕 34	劉 13	忸 40 柳 39	溜 74
早 從 雪			走 52 叟 46	奏 80 湊 83 嗽 71	啾 3 秋 12 修 19	(魯) 33 囚 20	酒 59	(就) 86 秀 69
枝 春 上 人	鄒 6 竊 31 搜 5	愁 32	(傷) 56 (臆) 57 洩 45	敏 79 悠 72 度 70	周 23 抽 21 収 24	紬 22 柔 14	肘 42 丑 41 首 44 ◎	畫 64 具 68 受 66
見 開 何 一	鈞 10 摑 9 駒 27 謳 7	侯 28	狗 49 (口) 55 吼 58 藕 50	勾 82 扣 75 后 76	鳩 4 丘 25 麻 1 憂 18	求 26 悠 2	九 43 (扭) 60 朽 53 有 38	舅 65 嗅 67 又 63

韻母 声調	16. 周 流 (入)		
	平	上	去
冰 破 梅			
風 無			
東 天 暖 来			六 87
早 從 雪		(宿) 62	
枝 春 上 人	軸 36 熟 37	竹 61	(肉) 88
見 開 何 一			

16. 周流

○ 平声

卓本では「1 麻」小韻は「6 鄒」「7 謳」の間に置き、「2 悠」小韻は〔陰陽〕の項の「18 憂」の対応陽小韻としてその直後に置いている。それを韻の冒頭に出しているのはこの二小韻に含まれる字によって本韻の韻目を表わそうとしたからなのであろう。そしてその後、韻目の変更があったのであろう。

「5 搜」に収める「𪛗」「洩」「𪛗」の三字は周本では別の小韻を形成してこの「搜𪛗」小韻と対立する。しかしいずれの小韻の字も『広韻』平声十八尤の同音字（所鳩切）であり、周本においてこの二小韻をどのように区別するのかよく分からない。⁽³⁸⁾ また『正韻』においても同音である。

〔陰陽〕の項にある「23 周」「24 収」の二小韻は対応する陽小韻をもたず、〔陰〕の項におくべきで

ある。但し卓本も〔陰陽〕の項にしている。

韻末に三つの増加小韻「33脣」「34舌」「35謀」がある。そのうち後の二者は周本にも見えない増加小韻であるが、「謀計謀」字は5車書、平声の「17模」小韻にも収められている。

○ 上声

「42肘箒耐」小韻は卓本においては「38肘箒竹取入作上」となっている。朱本は別に〔入声作上声〕の項を設けて「竹」字をここに収めている。

「42肘」以下の小韻の配列順序は卓本のそれと多入がある。

卓 本	朱 本
「38肘箒竹 <small>取入作上</small> 」	「42肘箒 <small>耐</small> 」
「39朽」	
「40九久韭灸糾」	「43九久韭玖糾 <small>赴灸疚</small> 」
「41首手守」	「44首手守」
「42酒」	
「43叟腹蔽」	「45洩」
「44洩」	「46叟腹蔽 <small>撒</small> 」
「45斗陡蚪」	「47斗陡蚪蚪抖」
「46剖」	「48剖陪培」
「47狗垢」	「49狗垢苟 <small>耇枸</small> 」
「48藕耦偶嘔」	「50藕耦偶 <small>嘔殿</small> 」
「49樓樓」	「51樓樓樓樓樓樓樓」
「50吼」	
「51走」	「52走」
	「53朽」
	○「54否 <small>咍</small> 」
	○「55口」
	○「56傷」
	○「57懸」
	「58吼」
	「59酒」
	○「60抵」

このうち〔○〕印を附したのは卓本にない小韻である。いずれも周本にはそれぞれ一字のみから成る小韻として収められている。朱本は周本によってこれらを増補したのであろう。⁽³⁹⁾

「45渡水和粉麴也」「46叟」の間に〔○〕印を加えて二分する。周本には上声の「渡」小韻はないが、卓本では「43叟腹藪」「44渡」とある。⁽⁴⁰⁾『正韻』上声十九有にも「叟蘇后切……腹……藪」「渡所九切沃也水和粉麴也」のように別の小韻を立てている。

○ 入声作上声

「62宿」は韻末の増加小韻である。周本には収められている。

○ 去声

「67嗅」「68臭」小韻の配列順序は卓本においては逆転している。

韻末に増加小韻がある。「86就」は周本に見える。「86A 佑与祐同」は韻末の増補字で、注記によって「63又右裕宥侑囿幼柚旣」小韻に併せなければならない。

○ 入声作去声

卓本は〔入声作上声〕とともに〔入声作去声〕の項を独立させていない。去声に「63溜留六取入作去」の小韻があるが、「中州楽府音韻類編校勘記」にいうように「取入作去」の注記は「六」字の下に置くべきで、「63溜留六取入作去」とすれば正しい姿となる。朱本は〔入声作去声〕の項を設けて改めて「六」字を収め、かつ「陸」字を増補したのであろう。因みに「陸」字は周本に見えないが、『正韻』入声一屋の「盧谷切」小韻に「六陸」が並んでいる。

韻末に増加小韻「88肉褥」がある。周本にも「肉褥」とある。

17. 金琛

○ 平声

朱本において各平声内の小韻は卓本の〔陰〕〔陽〕〔陰陽〕の順に従ってまとめて配列されているが、本韻のみ〔陽〕〔陰陽〕〔陰〕の順に並んでいる。しかし各項内の小韻の順序は卓本と全く同じであり、〔陰陽〕の項の末尾に二つの増加小韻が置かれている。増加小韻は小韻の配列順序に特に混乱が見られない限り、その韻末に置かれるという本書の体例のような点から見ると、本韻ももとは〔陰〕〔陽〕〔陰陽〕の順に配列され、〔陰陽〕の末尾に増加小韻が置かれていたのであるが、その後、伝写の誤りによって〔陰〕の項が〔陰陽〕の項のあとに出てしまったのであろう。それ故、韻目を表わす字の小韻は韻の冒頭に出ることはないが、今かりに〔陰〕〔陽〕〔陰陽〕の順に戻したとしても韻目を表わす小韻が冒頭に来ることはない。

韻末に二つの増加小韻がある。「19A 鐔鐔覃鶯」は独立した小韻とはせずに「5 尋潯鱗褥」小韻に合併するべきであろう。周本は「尋潯鱗鐔鐔鶯」の一小韻を有する。「12忱熈」は周本も平声陽の韻末にある小韻である（「20忱熈」）。

○ 去声

韻末に二つの増加小韻がある。「41淋」「44臨淋」いずれも周本に存在する小韻である（「38臨淋」「43淋」）。

また「43闌」は周本に見えない小韻であるが、卓本の韻末に収められている（「41闌」）。

韻 母 声母	17. 金 琛 其一				其二			
	平・陰	平・陽	上	去	平・陰	平・陽	上	去
冰 破 梅								
風 無								
東 天 暖 来				㊦ (咻) 41		琳 1	您 29 虞 22	賃 37 (臨) 44
早 從 雪			怎 30		寢 14 侵 13 心 4	尋 5	寢 21	浸 32 沁 31
枝 春 上 人	簪 20 森 19	岑 3	磻 26	譜 40 識 42 滲 39	針 15 琛 6 深 16	沈 7 (枕) 12 壬 2	枕 24 審 25 稔 23	朕 33 闕 43 甚 34 任 35
見 開 何 一					金 18 欽 10 歆 17 音 8	琴 11 吟 9	錦 27 飲 28	禁 36 蔭 38

18. 潭巖

○ 平声

第一小韻「威」は卓本においては〔陽〕の項、「9男」「10婪」の間におかれている。それがなぜ韻の冒頭に出されたのか分からない。もとの字を用いて韻目を表わそうとしたが、そのうち今の名称に変更されたのであろうか。「潭巖」の韻目を表わす小韻は冒頭に出ないで、卓本のもとの小韻の配列順序のままにおかれている。

韻末の増加小韻「23詁」は周本の「詁嘯」に相当するものである。『正韻』にはこの小韻を収めていない。

「23A 庵詁嘯不淨免与庵字同」は注記に従って「2庵」小韻に合併するべきである。

○ 上声

「26庵」「26A 黯」の間の〔○〕は誤りであると考えて一つの small 小韻に合併し、この小韻の音を [am] 上声と推定する。

「32減」小韻は卓本では「34庵」「35坎」の間にある。

韻末に三つの増加小韻がある。そのうち「36咎」「37肱」は周本に存在する小韻である。末尾の「37A 塽坎塽失志也与覽字同」はその注記によって「27覽」小韻に合併するべきである。

○ 去声

「42檻」「43淡」の二小韻は卓本では順序が逆転している。

韻母 声母	18. 潭 巖 其一				其二			
	平・陰	平・陽	上	去	平・陰	平・陽	上	去
冰 破 梅								
風 無								
東 天 暖 来	擔 4 食 11	覃 12 男 9 焚 10	膽 28 毯 29 (膽) 37 覽 27	淡 43 探 50 濫 44				
早 從 雪	簪 17 參 13 三 5	咍 18 寢 14	(咎) 36 慘 30 慘 25	暫 48 慘 52 三 46				
枝 春 上 人	(詰) 23 攏 21 杉 7	諫 22	斬 31	站 47 (懺) 53				
見 開 何 一	甘 6 勘 2 愁 15 庵 3	含 16	感 24 坎 35 喊 33 喊 26	贛 39 勘 38 憾 40 暗 41	監 8 ㊦ 19	威 1 巖 20	減 32 ㊦ 34	監 49 檻 42 滄 51

噉 45

また「42檻艦艦陷陷陷」のうち「陷陷」の二字は卓本においては「46三」「47站」二小韻の間にあり、「中州楽府音韻類編校勘記」は合併するべきであるという。周本はこれを合併し、朱本は合併して更に「陷」字を増補している。『正韻』去声二十一勘に「陷乎韻切地蹟……各小韻」「檻胡監切開也」があり、上声二十一感に「檻胡覽切……艦車声……艦戰船」がある。

「45噉闕闕嵌鎔」小韻は卓本においてもこの位置にあるが、「38勘」小韻と同音であり、「中州楽府音韻類編校勘記」は合併するべきことをいう。

「48暫湛整」小韻は卓本では「50A 蔘搭」の位置にある（「49暫整搭」）。両者は一小韻に合併するべきであろう。

「52慘」小韻の位置に卓本は「51慘七審切」字を収める。周本は「慘」である。韻末に増加小韻「53懺」がある。

19. 恬謙

○ 平声

韻目を表わす小韻「2謙」は対応陽小韻「18鈴」から切り離して第二小韻の位置に出している。しかし一方の「恬」字は卓本のもとの位置にある（「20甜恬」）。

「12纖」「13僉」「14擣」「15潛」の各小韻は以下の順に配列すれば〔陰〕〔陽〕の対を形成

することになる。

「12織」「14擣」

「13僉」「15潛」

○ 上声

韻末に増加小韻「32歛臉」がある。続いて「32A儼恭也」があるが、これは韻末の増補字であると考え、「23掩」小韻に合併するべきである。『正韻』上声二十二琰に「琰以冉切……儼恭也」、「奄於檢切……掩」がある。

○ 去声

「43染」「44膽」の二小韻は卓本では「33灑」「34欠」の間におかれている。また「42占」は卓本では「38贍」「39念」の間にある。

韻母 声母	19. 恬 謙			
	平・陰	平・陽	上	去
冰 破 梅				
風 無				
東 天 暖 来	掂 5 添 19	甜 20 鮎 9 廉 7	點 27 忝 31 (歛) 32	玷 35 [標] 45 念 39 漱 37
早 從 雪	尖 3 僉 13 織 12	潛 15 擣 14		僭 15 慝 36
枝 春 上 人	膽 1 檐 16 苦 6	蟾 17 髻 8	貼 26 諂 30 閃 29 染 28	占 42 贍 38 贍 44 染 43
見 開 何 一	兼 4 謙 2 杕 21 猷 10	鈴 18 嫌 22 塩 11	檢 24 險 25 掩 23	劍 40 欠 34 艷 33

「40劍」「40A儉」の間の〔○〕印は誤りであると考え。周本は「劍儉」の小韻を形成している。

「41A簞竹席」は増補字であると考え。『広韻』上声五十一忝に「簞竹席徒玷切」とあり、本韻の「35玷」小韻に併せるべきであろう。

韻末に増加小韻「45標燒火杖也」がある。『正韻』去声二十二豔に「標他念切」とある。

8. おわりに

元代に続いて明代においても戯曲は盛んに行なわれた。多くの作品が製作され戯台で演じられた。それは南戯を主とするものであったが、元曲の流れを汲む北方系の雜劇も行なわれた。⁽⁴¹⁾特に宮廷においては正徳の頃（1506—1521）にもなお専ら北曲が行なわれていたことは、胡侍の『真珍船』⁽⁴²⁾ 卷三北曲の条に、

北曲の音調は大都おおもね舒雅にして宏壯、真に能く人をして手舞足踏し、一唱三歎せしむ。南曲の若きは則ち婁婉嫵媚にして、人をして歎ばざらしむ。……故に今、朝廷の郊廟に之を奏するは、もっぱ純ら北曲を用いて南曲を用いず。

とあることから知ることができる。また李開先(1501—1568)の「喬龍谿詞序」(『李中麓閑居集』巻五)は南北曲の歴史を一瞥したあと、

下りて金元の套・散・雜劇等に及ぶまで北は其の本質なり。故に今の朝廷の郊廟の楽章は、北を用いて南をせず。

といい、嘉靖年間(1522—1566)にもなお北曲が用いられていたことを物語るが、それも専ら雜劇が上演されていたようである。沈德符の『野獲編補遺』巻一禁中演戲の条には、

内廷の諸戲劇は俱に鐘鼓司に隸す。皆な相い伝えらる院本を習い、金元の旧に沿う。

とある。

劇を好む宮廷の風尚が王府にまで及んだ例として、わが寧獻王・朱権の他に、周憲王・朱有燉(1377—1439)を挙げることができる。太祖の第五子周定王・朱棣の長子で、誠齋と号した。雜劇の作家として知られ、その作品は現存するものだけでも三十一種にのぼる。⁽⁴³⁾ 二王は専ら北方系の雜劇を書いたが、これも宮廷における北曲の採用をうけたものであろう。

このような情況のもとで安徽省出身の王族たちは北音の正しい伝統を示す曲韻の書が必要としたのである。燕山の卓從之の『中州樂府音韻類編』にもとづいて、これに増補改訂を加えた寧獻王・朱権の『瓊林雅韻』はいわばその要求に応えたものであるといえよう。⁽⁴⁴⁾ 朱本は北方共通音の伝統の上に立っている。それ故、小韻の増補や各字の増加もすべて北方共通音の枠組に合致する形で行なわれている。その最大の特徴は平声の陰陽の別を立てないこと、所収の各字に簡潔な注解を加えたことであるが、曲韻の書に始めて注解が施されたのは、文人が散曲を製作し、また戯曲が文学作品として文人の書齋で読まれるようになったことと恐らくは関連があろう。そして曲論の盛行がこれに続く。

朱本もよく行なわれていたらしく、何良俊の『四友齋叢說』巻三十七には次のような記事が見える。

老韻は『中原音韻』『瓊林雅韻』を終年手より去らず。故に開口・閉口と四声・陰陽の字は八九分皆な是なり。⁽⁴⁵⁾

また王驥徳の『曲律』巻三論韻は、

涵虚子に『瓊林雅韻』一編あり。又た周韻と略ぼ似たり。則ち亦た五十歩の走なり。

という。涵虚子とは寧獻王・朱権のこと、周韻とは周徳清の『中原音韻』を指すこというまでもない。

『瓊林雅韻』のもう一つの特徴である平声における陰陽の別の廃止については先に述べた通りであるが、音韻史の流れから見て、明代にはいつて突然それを実行しなければならない事情が生じたとは考えられない。南京の宮廷(のちに北京に移る)及びその周辺において行なわれた言語

は広い意味での北方共通語であるといつて大きくは誤らないであろう。『明史』卷一太祖本紀に、太祖、諱は元璋、字は国瑞、姓は朱氏。先は世よ沛に家し、句容に徙り、再び泗州に徙る。父の世珍、始めて濠州の鍾離に徙る。

とある。濠州は安徽省鳳陽府、今の蚌埠市一帯の地を指す。当時は中都が置かれた。

では何故に平声の陰陽の別が廃止されたのであろうか。私は『洪武正韻』の影響によるところが大きいと考える。明初の不安定な政治状況を背景に、太祖敕撰の韻書である『洪武正韻』の權威は圧倒的なものであった。『瓊林雅韻』が平声の陰陽を分けないことは、伝統的な四声の平上去入に従って巻を分けている『洪武正韻』の体例を遵守した結果であると考えられる。その他、小韻の増補・字の増補・注解の附加などにも、『洪武正韻』は大きな影響を与えたといえよう。

注

- (32) 『正韻』去声十一霽の「眩眩發發切切目無音主」小韻に「炫炫火光也也……衍衍行且實也也……玟玟玉名」とある。朱本は「炫炫火光也也衍衍行且實也也玟玟玉名」とあり、この三字は『正韻』によって増補したことが推測できる。
- (33) 疑母字が影母（喻母）字とは独立して小韻を成している恐らく唯一の例である。朱本は卓本をそのまま襲っているが、『詞林要韻』は兩小韻を一つに合わせている。「臬臬煖煖煖煖煖煖鑿鑿畷畷煖煖」。
- (34) 『詞林要韻』では正しく「31橋橋跳跳」「32橋橋喬喬僑僑叢叢踴踴」という陰陽の対を形成している。
- (35) 『正韻』入声六霰「疾雀切」小韻に「嚼嚼咀咀」とある。
- (36) 「饑饑經經也」の「經」は「輕」の誤字であろう。『広韻』入声十六屑に「饑饑輕輕」とある。
- (37) 『詞林要韻』も「1 庚庚更更鵬鵬羹羹耕耕」「2 荆荆驚驚兢兢矜矜涇涇京京盞盞經經」の二小韻に分ける。
- (38) ただ「中原音韻正語作詞起例」には「洩洩有有洩洩」の一項があり、兩字を区別して読むべきことをいう。
- (39) 『中原音韻』十一尤侯上声の韻末は一字のみの小韻が続くが、鉄琴銅劍樓本などは「54走」「55否」「56揉」「57口」「58傷」「59慙」の各小韻を並べる。現在最も信頼すべきテキストとされる訥菴本は「揉」字のあるべき位置が空白となっている。卓本は恐らくこの訥菴本系統の『中原音韻』を使ったのであろう。
- (40) 「中州楽府音韻類編校勘記」（『中原音韻』全三冊、1978年）に「“洩”小韻は『中原音韻』では平声に収めてある」というのはとらない。周本平声の「洩」は朱本平声の「洩洩也」に相当する語である。『正韻』平声十九尤にも「洩洩也」とある。
- (41) 以下の記述は岩城秀夫「明の宮廷と演劇」（『中国文学報』第1冊、1954年）に多くを負う。
- (42) 嘉靖27年（1548）の序をもつ。胡侍は正徳14年（1517）の進士。
- (43) 入矢義高「周憲王楽府解説」（京都大学漢籍全本叢書、『周憲王楽府三種』1981年）。そこには更に「これはどままでに好みを同じくした兩人（周憲王と寧献王）の間には、特に詞曲の創作に関する限りでも、必ずやなんらかの交渉があったに違いないと推察されるが、残念ながら明確な証拠はない」とある。
- (44) 李新魁の『漢語音韻学』1986年は次のようにいう。「それ（『瓊林雅韻』）は『中原音韻』と『中州楽府音韻類編』の修訂と補充であったといえる（p.62）。」
- (45) 「老頼」とは頼仁のこと、南京の教坊に属した楽工で、正徳年間に駕に従って北京に赴き、教坊で北曲を学んで来た。

文 献 表

- 1932 趙蔭棠「始得瓊林雅韻」(『中法大学月刊』1—4)
 1932 趙蔭棠「中原音韻研究」(『国学季刊』3—3)
 1954 岩城秀夫「明の宮廷と演劇」(『中国文学報』第1冊)
 1956 上田金次郎「中古漢語の入声の変遷と北京語の破音の現象(1)(2)」(『中国語学』52、53)
 1957 上田金次郎「北京語における旧入声」(『高知女子大学紀要』6—2)
 1957 辻本春彦「洪武正韻反切用字考」(『東方学』13)
 1958 服部四郎・藤堂明保『中原音韻の研究・校本編』(江南書院)
 1974 頼惟勤「『切韻』について」(『宇野哲人先生白寿祝賀記念東洋学論集』)
 1977 佐々木猛「明・王文璧『中州音韻』の性格」(『均社論叢』5)
 1978 陸志章・廖珣英「中州楽府音韻類編校勘記」(『中原音韻・附中州楽府音韻類編』巻下所収、中華書局)
 1979 趙誠『中国古代韻書』(中華書局)
 1979 佐々木猛「中原音韻正語作詞起例、譯注」(『均社論叢』8)
 1981 邵榮芬『中原雅音研究』(山東人民出版社)
 1981 入矢義高「周憲王楽府解説」(『周憲王楽府』同朋舎)
 1981 平田昌司「『刊謬補缺切韻』的内部結構与五家韻書(1)」(『均社論叢』10)
 1981 佐々木猛「『中州楽府音韻類編』によって『中原音韻』の誤りを正しうるか」(『福岡大学人文論叢』12—4)
 1982 平田昌司「『刊謬補缺切韻』的内部結構与五家韻書(2)」(『均社論叢』11)
 1986 李新魁『漢語音韻学』(北京出版社)
 1986 黄文実「『太和正韻譜』曲論部分与曲譜非作於同時」(『文学遺産』第6期)
 1988 鈴木勝則「『瓊林雅韻』について(上)」(『中国語学』235)
 1989 遠藤光暁「『切韻』反切の諸来源」(『日本中国学会報』4)

『瓊林雅韻』略年表

朱 権 の 事 項	関 連 す る 事 項
	1324 『中原音韻』自序
	1351 『太平楽府』鄧子晋の序(『中州楽府音韻類編』)
1378 (洪武11) 朱権生まる	1375 (洪武8) 『洪武正韻』
1391 (洪武24) 寧王に封ぜらる	
1393 (洪武26) 大寧に蕃す	
1398 (洪武31) 『瓊林雅韻』『太和正音譜』自序	1398 (洪武31) 洪武帝崩ず
	1399 (建文元) 燕王朱棣挙兵
1403 (永楽元) 南昌に改封せらる	1403 (永楽元) 永楽帝即位
1425 (洪熙元) 南昌から他に改封されんことを求め るも許されず	1421 (永楽19) 北京に遷都
この年『神奇秘譜』自序	
1448 (正統13) 薨ず。享年七十一歳	

・（上）編、正誤表

- p. 89 ℓ . 5 「洋細」→「詳細」
 p. 90 ℓ .10 「加え」→「加えて」
 p. 91 ℓ .18 「驕怨」→「驕恣」
 p. 98 ℓ .20 「全濁音声」→「全濁音去声」
 p. 98 ℓ .23 ℓ .24 「穹高也筇竹名窮極也兜虫名叩地名又勞也」の一行にする。
 p.100 ℓ .21 「平音」→「平声」
 p.105 ℓ .20 「49A 征」→「48A 征」
 p.108 ℓ .13 「28花」→「28衣」
 p.114 （入）其二の表
 上、〔最〕→〔最〕
 去、「玉136」 一段下げる。
 p.115 ℓ .31 「21埃」→「21埃」
 p.117 ℓ .22 「埃21」→「埃21」
 p.120 ℓ .40 「股部」→「服部」
 p.120 ℓ .42 「趙蔭堂」→「趙蔭棠」

（1992. 5. 12 受理）